

柴田剛介

人は人生という絵を描く画家

私はいままでどんな絵を描いてきたのか

これからどんな絵を描こうとしているのか

【はじめに】

人口6000人のまちで育った少年期。先輩から貰った一着の古い柔道着を大切に、日々道場に通っていた。それは私にとって頼もしい友であった。「襦袢は着てても心は錦」とはよく言ったものだが、当時の私はそんな言葉も知るよしもなく、ただただ強くなりたい一心で練習に励んでいた。今から思えば、そのとき抱いていたのは幼さゆえの劣等感だったのかもしれない。いつか真新しいそれを身に着けたいと心の奥底では思い続けていた。その後、進学のため、上京することとなる。私は3畳一間のアパートに下宿を決めた。決して十分な環境とは言えなかったが、その部屋の窓から見える景色は、無限の可能性を映し出し、私は新たな人生のスタートを切った。

物事には必ず始まりがある。その始まりは人それぞれに違うものであり、それは不平等であるかもしれない。その気まぐれに現れる不平等という感情は、私に期待感と健全な劣等感をもたらし、それらは絶えず新しい目標を与えてくれた。

私の心には部屋の窓から見えた景色が、今なお鮮明に残っている。人は誰でも、目を閉じると絵が思い浮ぶ。それはこれまで歩んできた軌跡であり、心の拠り所となる。また、その軌跡の先端には必ず目標があり、それが人々の希望となるのである。

人は人生という絵を描く画家である。やがて私は、社会に出て、企業の人となり、地域の市民となり、その都度目標を与えられ、振り返れば自分なりの絵を描いてきた。そして、いま私にかつてなく大きな目標を与えてくれているのは青年会議所であり、これから新たな絵を描こうとしている。

物事は見えるだけが本質ではない

「何が起きているのか」核心を明らかにする必要がある

核心を追求し続けるところには、必ず青年がいる

【一人の青年の核心から一世紀】

20世紀初頭アメリカ第4の都市であったセントルイスは、同年にオリンピックと万博が開催されるなど、文化的、芸術的に繁栄した流行発信の都市であった。そのセントルイスに伝わる文化を守るため、ハーキュレイニウム・ダンス・クラブを主催する一人の青年がいた。その青年とは、ヘンリー・ギッセンバイヤ・ジュニア。JCの創設者である。ある日、彼は市議会議員コロネル・ヒューズ・N・モルガンとのミーティングの中で、一つの核心にたどり着くこととなる。

当時セントルイスには、一本のハイウェイが開通し、その文明的発展は人々の希望となっていた。しかし、本当に住み良いまちをつくるのは、文明だけではなく、そこには人々の心の拠り所となる文化が必要であり、それらを守れるのは市民の力であるという核心だ。ACTIVE CITIZENSHIPである。そして1915年10月13日最初のチャプターとして、進歩的青年市協会（YMPCA）を設立することとなる。これがJC運動の始まりである。

核心を追求する青年は時として時代に風穴を開ける。それは昔も今も同じだ。誰もが経験したことのない難問にぶつかるのは、核心を追求する青年だからであり、JCが先駆者と言われる所以でもあろう。成功、失敗全てを経験する。そしてこの経験をすべて後世のために伝えていく。JCとは、そのような組織なのである。

一世紀前、一人の青年の志と今を生きる我々の志は何一つ変わっていない。

【人生のものさしとは】

人は組織の規模や経験の長さなどを評価するとき、数値的に判断しがちである。時には、その人の人生までも数字で判断してしまうこともある。しかし、人生は決して数字では評価できないと私は考えている。何故なら、人々の幸せにどれだけ貢献できたかが、人生を評価する唯一のものさしだと確信しているからである。

『成熟したナショナリズムと民間外交、そして地域経営を通じて、日本の繁栄を願う。』

これが日本青年会議所2015年度の普遍的な考え方である。人々の幸せにどれだけ貢献できるのか。この人生のものさしをもって日本の繁栄を目指そうではないか。

私たちは深く結ばれている
国と私たちはもっと深く結ばれていく
国のかたちを描くのは青年の任務だ

【東日本大震災から学んだ成熟したナショナリズム】

日本人として生まれたことを誇りに感じずにはいられない。東日本大震災がもたらした津波は無残な傷痕を残したが、日本とはどのような国なのかをあらためて見直す機会となった。震災直後、多くの人々は誰の要請を受けたわけでもないのに、被災地に駆け付けた。その行動は、特定の人に向けられたのではなく、同じ日本という共同体に暮らす仲間のために、いま自分ができることを自ら考え行動に移したのである。一人でも多くの仲間の安否を気遣い示した行動は、世界から賞賛を受けた。何故、多くの人々が支援に動いたのか。それは日本という国自体が、自然に成立した国家だからに他ならない。ひるがえって、民族、言語、国土、文化、宗教というナショナリズムの五大要素がほぼ一致し、しかもそれが自然に成立した国は世界でも日本くらいであろう。連綿と続く共通の文化や伝統の中で価値観を共有し、何かあった時はお互いに助け合うといった気持ちと文化があり、そこには顔や名前を知らなくても家族であるという絆が存在している。私はそれを成熟したナショナリズムと呼ぶ。

このナショナリズムの大切さを、人々は震災によって再び気づくこととなる。日本の底知れぬ力を知るとき。日本人として再び誇りを取り戻すのである。

【国史を学ぶことが安全保障の基本】

世界各地で思想や宗教を背景とする、国家間・民族間の紛争や対立が起きている。かつて文明国の多くも、強力な指導者の下で戦い、国家の統一や維持を図ってきたことは歴史が語っている。一方日本は、そのようなイデオロギーの紛争や対立でできた国家ではなく、共通の文化や伝統などを共有することによってできた2674年の悠久の歴史を誇る万世一系世界最古の自然国家である。そのような自然国家である日本は、諸外国と比べはるかに安定した秩序を有しており、世界に誇れる国家となっている。この安定した秩序が保たれているのは、日本には地球全体を大きくゆっくりと流れる深層海流のような、2674年の悠久の歴史が流れているからであり、その中に日本固有の精神が宿っている。また、日本は外来文化を受け入れても、それらはあくまでも大海の表層を流れる水流のようなものであり、決して日本の歴史や精神を失うことはない。だからこそ、日本は何処の国よりも崇高な理想を持つことができるのだ。しかし、いまの日本はどうであろう。どれだけの日本国民が、日本の建国について答

えられるであろうか。残念な話だが、アメリカであればジョージ・ワシントン、中国であれば毛沢東の存在を知っている日本国民の方が多いかもしれない。このような状況では、日本が当り前の国とは到底言えないのではないだろうか。

未来を担う小中学生を中心に、国史を学ぶ機会をつくり、日本を誇りに感じずにはいられない、そんな教育への取組みを進めたい。

【理想の国家像を示す】

憲法とは、国家に権力を付与、制限すると同時に、主権者である日本国民がどのような国家体制を築いていくか、その基礎となる法規範である。しかしながら、現行憲法施行後67年が経つ中、一度も日本国民の声を聴く機会がなかった。近年、我々を取り巻く安全保障や平和維持、自然保護など周囲環境は大きく変わり、改憲・護憲の議論や憲法解釈についてメディアなどで目にする機会が増えた。しかし重要なのは主権者である国民一人ひとりが建国の父になったつもりで世界に誇れる憲法を描いてみることである。2012年、日本青年会議所は改訂版日本国憲法草案を発表した。この草案をもとに論議を尽くし主権者意識の醸成を図ると共に、国民投票の投票年齢を改正法施行から4年後に「18歳以上」に引き下げることが議論されているいま、未来の有権者である若年層でもWEBやSNSを使った憲法論議を起こしていきたい。

不易流行という言葉があるが、日本が連綿と受け継いできた歴史と精神、即ち「不易」と、時代背景によって動く社会に適合すべきところ、即ち「流行」を見定め、いまこそ理想の国家像を示すときである。

【安全で安心な国をつくる】

北方領土や竹島の不法占拠、尖閣諸島領海侵犯並びに空域の管轄権主張など、国境問題や事件は優れたリーダーが現れないと解決に向かわない。しかし、我々はその出現をただ待つわけにもいかない。何故なら北方領土占領前の生活やポツダム宣言後の惨事の語り部である島民の方々は、高齢化が進み一日でも早い返還が望まれるし、竹島については自国のナショナリズムの高揚のために不法占拠がなされており、時間と共に両国間の国民の関係が悪化している。また、この瞬間も力を背景とした一方的な行為によって、南シナ海では国家間の対立が続いており、東シナ海でも日本の領海への侵入が相次ぎ、海上保安庁や自衛隊が高い緊張感を持って警備を続けている。その中、国会では尊い命を守るため、限定的な集団的自衛権の行使についても憲法解釈が閣議決定され法整備に向かっている。だからこそいま、世界の秩序の中、安全保障という

観点で領土領海領空について正しい知識と強い意志を持つことで、安全で安心な国をつくる主権者意識を高めていきたい。

こういう時代だからこそ、正しい情報を得られなかった日本国民に対して完全に情報を開示していくことが求められている。

【誇れる政府をつくる】

主権者（有権者）によって選ばれた政治家は、日本国民の生活を豊かにするために政治を執り行なう。また、その政治家によって管理される組織が政府である。つまり、政府の質は主権者（有権者）の質が反映されているのである。これまで各選挙において立候補者が、故郷を誇りに思える教育を掲げているか、労働生産性の高い政策を掲げているかなど、日本青年会議所の事業の観点で点検をしてきた。また若年層をターゲットとし、WEB上にe-みらせんをつくり、立候補者の生の声を届けることで、政治参画への関心度を高め、政策本位による政治選択を押し進めてきた。さらに全国で公開討論会を開催し、クロストーク型を用いるなど、政策の違いだけではなく、立候補者の政治家としての力量や人となりまでも届けてきた。成熟した民主主義国家において、国や地域を良くするために与えられた手段が紛争や暴力ではなく選挙である。2015年3月統一地方選挙が行なわれるが、これを好機として捉え、自らの責任で誇れる政府や地方自治体をつくる主権者意識を高めていきたい。

いまの政治を非難する前に、日本国民は主権者として政府の一部を担っていることを自覚し、自らの意思を示すときである。

世界の中の日本を強く意識する
世界に貢献できる国がある
その担い手こそ日本の青年だ

【国益を生む諸外国との民間外交】

間違いなく今世紀、世界の生産と消費の中心となるのは、中国やロシアを含んだユーラシア大陸であり、日本が現在の豊かさを維持するためには、この中国やロシアとの関係がいまより格段に重要度が増すことは否定できない。特に、中国は長い歴史を

見ても日本との関わりが深い国である。近年この中国の急激な経済成長がよい意味で競争を生み、更なるアジアの繁栄、ひいては日本の繁栄につながっている。アジアを牽引する良きパートナーとして、先駆者的経験を積む日本青年会議所とアジアの大国を支える中華全国青年聯合会が手を結び、アジアの平和と安定に向け未来志向な関係を構築していきたい。また、ロシアも文学・武道・アニメなど日本文化が浸透し、親日的で、価値観が共有できる大国である。この価値観の共有は経済・教育面において互いの理解に対して障害が少なく、時間を有しない。その中で、オポラロシアとの経済交流は、戦後世界史上もっとも経済的に繁栄した日本企業の技術と経験が、今後更なる両国間を繁栄に意義深い成果を導くと確信している。

確かに政府間では解決に取り組みなくてはならない課題や問題が存在している。日本の繁栄を考えると、自分の価値観を押し付けるのではなく、お互いに誠意をもって相手を理解することが民間外交では重要なことであり、決して個別の問題で全体の利益を見失ってはいけない。

【国際社会に貢献する】

戦後日本において、どの組織も国際社会で明確な立ち位置がない中、1951年5月にカナダモントリオールで開催された第6回JCI WORLD CONGRESSでフィリピン出身のラモン・デル・ロザリオJCI会頭（当時）が、JCには国境も民族も関係ないと、JCIにかつての敵国であった日本のJC代表団を受け入れたことは有名な話であるが、この精神と我々の先輩方の国際社会への復帰に対する熱い情熱があったからこそ、いまの我々が存在することに感謝しなければならない。つまり、63年経ったいま、JCIのリーディングNOMまで成長させて頂いた日本青年会議所は、この恩を未来へ送るべく、JCIを通じた国際社会への貢献は何も特別なことではなく自然な行ないなのである。また世界で殆ど類を見ないが、我々のバッチには国連マークが刻み込まれており、近年JCIは、その国連が掲げる国連ミレニアム開発目標（UN MDGs）に全面的に協調・協力を行なっている。この目標期限は2015年で最終年度を迎えるが、運動の意義や目的を絶やさぬよう、世代を問わず身近でできる国際貢献JCI NOTHING BUT NETSキャンペーンを草の根運動として展開し、市民一人ひとりの一歩が国際社会に大きく変革をもたらすことを伝えていきたい。併せて日本の小中学生には、国連の施設や国際貢献の活動内容を肌で感じる機会を提供し、国際社会の一員である意識醸成を図ると共に、その彼らの成長を応援する、そんな社会をつくっていきたい。

世界には何の罪もない子供たちが笑顔を失っている事実がある。不平等であっても公平でなければならない。63年前、我々も優しく手を差しのべられたように、温かい心をもって貢献することが国際社会から本当の信頼を得ることにつながるのである。

【日本のファンづくり】

悠久の歴史を誇る自然国家日本に住み暮らす人々は、生きることに誠実に自らの価値観を磨き上げてきた。そんな価値観で溢れた日本は、世界に誇りたくなるくらい美しい共同体をつくり上げている。明治初期その日本を訪れたラフカディオ・ハーンやイザベル・バードたちは、日本の心に触れ、感動し、ファンになっていった。2015年度も国内外問わず、日本の心をもって日本のファンづくりを行なっていく。心に触れての感動があればこそ、必ずやファンになってくれるし、これは未来に大きな幸福をもたらすに違いない。これが民間だから自由に楽しくできる外交なのである。また、一人の青年の核心から始まったJC運動はいよいよ100周年を迎える。この記念すべき年に、JCI WORLD CONGRESS金沢大会が国内で開催される。日本らしさが色濃く残る都市で開催されるこの大会は、過去日本を訪れた偉人たちと同様に、世界中のJAYCEEに日本の心という感動体験を与えるだろう。

この日本のファンづくりは、改めて我々に日本の底知れぬ力を知らしめてくれる。日本人としての誇りを取り戻すこと。これが何事にも代えがたい国益なのである。

自分たちの地域を見つめ、改革する
地域の文化と現代の文明を組み合わせる
地域再興の先頭に立つのは青年だ

【イノベーションを起こす思考をもつ】

イノベーションを起こす人は、既存のアイデアを組み合わせることができる人である。決して、ゼロからつくり出すことが求められているわけではない。これは「何故こうなっているのか」「どこに問題があるのか」といった核心の追求から生まれるのである。いまの日本は戦前戦後とは違い、電気、水道、電話、そして教育機関などの社会基盤は整備され、最低限の生活には困らないほどの環境が整った。このような状

況下だからこそ、いつまでも国に頼る中央集権型ではなく、地方分権等自立自活して発展する地域経営主義で地域再興を目指そうではないか。地方で人々が大切に守り続けてきた文化にフォーカスして魅力の発見と再興を図っていききたい。そしてその活動を通じて、日本のこれからの文明の在り方について考えていこう。

【制度改革、目的税を活用した地域再興計画】

アベノミクス効果や東京オリンピック効果で日本全体の景気は上向き傾向であるが、地方に目を向けると、まだ何か慢性的な疾患があるようで、自覚症状はあるが、その具体的な病名や治療方法がわからない状態である。現在の日本は、かつての国主導による国土の均衡ある発展を目指してきた「地域開発」の時代から、地域が自らの智慧と資源を活用することが求められる「地域経営」の時代への過渡期にある。これは付加価値の高い地域特有の文化や自然、伝統や歴史などの「地域資源」を用い、地域に住まい、地域を愛する「地域人材」が「地域経営」を行なうということである。そのためにはまず、内閣官房に設置された地域活性化統合本部による「構造改革特区制度」並びに「地域再生計画」、また地方分権一括法により可能となった「法定外目的税」を存分に活用し、いかに地域の魅力ある資源を分析し高付加価値化するか、経営的視点で各地会員会議所と共に進めていきたい。

地方がこのまま慢性的な不況で、殺伐とした地域と成り下がるか、それとも先駆者として課題を乗り越え、再興を遂げた地域となり脚光を浴びるのか、それは一概に政治家や官僚ばかりの裁量や責任ではなく、我々青年の肩にかかっているのである。

【モノ消費からコト消費へ】

観光立国推進基本法に基づき、2012年3月30日に閣議決定した「観光立国推進基本計画」の効果もあり、2013年初めて訪れる外国人観光客の数1000万人を超え、今後間違いなく日本に感動体験を求めて訪れる観光客が増えることが予想される。その中、20世紀末頃から世界各国で日本ブームが静かに高まりつつある。無形文化財として2013年に登録された「和食」、食器や伝統工芸品などの職人技、アニメやマンガのクールジャパン、おもてなしなどのホスピタリティは、興味や物珍しさの域を超え、日本人の日常の生活が世界中の人々から好感されていることを示している。その最大の特徴は「五感に触れての感動」を通して、「心に触れての感動」に至る感動体験の深まりである。これら日本を代表する文化は、地方を中心とした地域経営の最大の武器でもある。しかし、これまでのような基礎自治体単位でのまちづ

くりでは、モノ消費が主流となり、コト消費に対応することが困難である。つまり、この取り組みだけでは経済的発展、雇用創出には限界があり、地方分権等自立自活した地域を作り出す第一歩を踏み出せない。ところで、世界では滞在型観光業は自動車産業より大きいというが、J Cのネットワークを駆使することで、そこには地域経営の活路がある。それは潜在的観光客に合わせた観光目的地を、地域に住まう人々と日本に在学する感性豊かな留学生が共に企画し、滞在型観光をつくるという戦略である。これまで各地で磨き上げてきた「地域のたから」を始め、慣習やサブカルチャー、近代工業や職人の技などにもフォーカスを当てたコト消費を主流とする感動体験が地域を再興させてくれるのである。また、これら共通の財産をもつ地域は決してライバルではなく、中期的ビジョンを掲げ世界を舞台に戦える友でもあるのだ。

そこに住まう人々が豊かでないと、その地に訪れる人はいない。地域経営による日本再興の解は、我々の日常生活の中に存在するのである。

【音楽とスポーツの力によるまちづくり】

音楽やスポーツは私たちに感動や勇気を与えてくれる。この心に触れる感動体験は、言葉では表現できない力があり、どんな有能な識者が持論を訴えようとも、勝ることはできない。そんな音楽やスポーツを通じて生涯忘れられない体験をしている子供たちで溢れるまちの姿は、住まう人々にとって心の拠り所となるのである。

復興創造フォーラム2014で「未来へつなぐプロジェクト～音楽のちから～」を発表した。この曲は復興のシンボルとして、東日本大震災の被災地に心を寄せ、真の復興を成し遂げるためにつくられた曲である。被災地の子供たちの言葉や表情を感じ、その思いを歌詞やメロディーにのせたこの曲は、被災地そして日本全体に力強く夢や希望を与えるだろう。全国の子供たちがこの曲を合唱する姿が広がれば、2020年夏季五輪開催までに、必ずや被災地に明るい兆しが見えてくるに違いない。

また、一般社団法人日本サッカー名蹴会と日本青年会議所は2014年からJ Cカップをスタートする。名蹴会が掲げるグッドルーザーの精神を身に纏った子供たちが全国から集まる大会は、地域の人々に夢や希望を届けてくれるに違いないし、この大会を地域全体で盛り上げる、そんな社会をつくりたい。大会に参加した子供たちの中から、2020年夏季五輪、日の丸を背負う選手が誕生することを心から願う。

これからの半生を賭けて絵を描こう
JAYCEEの持つ潔さと誠実さで
美しい未来が訪れるように

【JAYCEEのものさしとは】

世界中、どこの国や地域でもJCの活動は、JCI CREED、JCI MISSION、JCI VISIONの唱和から始まる。これはJAYCEEがJC運動の基盤となる同じ綱領や使命を確認するものであり、我々もこれを大切に守り続けてきた。世界でもトップの組織力を誇る青年の団体を一世紀に亘り維持、発展させてきた背景には、このセレモニーを始めとしたJCの決まり事を大切にする文化があったからであることは歴史が語っている。また、そのことは同じ志をもったメンバーが国内はもとより、世界中に多く存在することを教えてくれる。全国には696の会員会議所があり日々、それぞれの地域の問題・課題と向き合い運動を展開している。その基盤にあるのがJCプロトコルともいえる各地で連綿と受け継いできた所謂「決め事」である。全国の会員会議所にとってメンバーの減少や、在籍年数が少ないメンバーが多くなってきているいま、JCがJCであり続けるために、「決め事」を当たり前に行なえる文化を支える取り組みをLOM支援として進めていきたい。

全国には同じ志で歩みを進める仲間が35000名いる。これは地域、日本、そして世界により良い変化を及ぼす大きな可能性そのものであることに他ならない。JCの一体感や同一性を確認できる機会を会員会議所と共有することで、同じ時代を生きる青年として絵を描いていきたい。

【誠実であるということ】

JCに入会する転機が訪れる。当時、金沢に何も所縁がない私であったが、先輩の配慮もあり、今風で言うと入会規程の解釈の変更により晴れて一員となることができた。そして、これまでこの組織の中で様々なタイプのリーダーと巡り合っている。聡明で戦略的な人。表現が豊かで人を魅了する人。無口であるが実行力がある人。朝方まで熱く語り続ける人もある意味リーダーであった。ただ、そのリーダーたちに共通して言えることは、物事に対し誠実であるということである。この誠実さとは、人間の根源に触れる部分であるが故に誰からか教わるものではない。自らの日々の行動によって自然と身に付くものである。だからこそ、誠実に向き合っている人の姿は美しく、人々を引き付ける魅力となっている。JCという共同体に対し誠実なリーダーが、私にとって真のリーダーであった。

志を立て自分を振り返るため、故郷を訪れてみた。昨日のように記憶は甦ってくるが、少年期大きく感じたまちは、なんだか少し小さくなったような気がした。文明は人々の希望となり、文化は心の拠り所になる。そんな理想をもってJCをやってきた私であるが、もっと国や地域に対し誠実さが必要なのであらうと感じた。

「人生は栄枯盛衰であり儂く、誰でも必ず衰える時が来る。その時その相手に、優しく手を差しのべ、歩み寄れる人間こそが、本当の信頼を得ることができる。」

そのようなことを教わったことがある。これは人生だけではなく、国や地域に対しても言えることなのかもしれない。

あなたを待つひとは必ずいる。一度しかない人生。リスクヘッジなJCはやめて、もし、あなたが決めたなら、それにすべてを賭けようではないか。この潔い思い切りこそ青年らしい。失敗してもいい。それどころか、どうせ失敗するなら派手に失敗しようではないか。全てが成果であり、だからJCは面白い。そこにJAYCEEがいる限り、底知れぬ力をもつ日本は必ず再興できる。必ずである。

すべては未来を生きる人のために。先駆けよう、JAYCEE。美しく先駆けよう。